

第 4 章

調査研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

近年における卒業生の実態調査

～キャリア教育の視点を通した教育課程の編成のために～

(2) 設定理由

平成24年度の課題研究で「キャリアプランニングを中心とした基礎的研究」が行われキャリア教育の学習が始まり、研究推進委員会が中心となって「今養版キャリアプランニングマトリックス」が作成された。そして、平成25年度には各種課題研究や教育実践研究が行われ研究を深めることができた。また、プロジェクト研究では教育課程検討委員会が中心となりキャリア教育の視点から「教育課程（行事）の見直し」のアンケートを行いその結果を総合的に考察して担当部署にその行事の課題を報告した。そして、教育課程検討委員会では、更に研究を深めるために卒業生の実態と意識調査を通して今後の教育課程の編成に役立てることを検討した。進路指導部では、毎年卒業生の活動を研修会で報告していたが改めて卒業生をとりまく環境の調査をまとめ、本研究を通してキャリア教育の視点を通した教育課程の編成に寄与できるであろうと考え実施する。

(3) 研究の内容と方法

- 最近の卒業生の実態と就労状況や生活の様子をもとに調査する。また、本校での学習が卒業後の生活にどのようにかかわっているかを調査することによって今後の教育課程の編成に寄与する。
- 調査は進路指導部外勤者の聞き取りをもとに行う。その他にも青年学級、同窓会一泊旅行なども利用する。

(4) 推進日程

- 4月28日 第1回研究推進委員会：今年度の研修内容確認
- 5月8日 第1回進路指導部討議：今後月1回程度開催予定
- 7月1日 第2回進路指導部討議：開校来の就労者・離職者の実数把握
- 7月30日 第3回進路指導部討議：卒業生事例の選出
- 8月20日 第4回進路指導部討議：卒業生事例の一部確認、研究の進め方の確認
- 10月3日 第5回進路指導部討議：卒業生事例の報告・考察1
- 10月24日 全体研修（中間発表会）
- 12月1日 第6回進路指導部討議：卒業生事例の報告・考察2
- 平成27年1月16日 進路研修
- 平成27年2月10日 第7回進路指導部討議：まとめ
- 平成27年2月13日 全体研修（校内研究報告会）

2 研究のまとめ

(1) 離職率と離職理由

まず始めに、一般就労をした卒業生の離職について、その実態を調査する。

表1 本校の卒後3年以内離職率

①	過去15年（1～15期生）	36.6 or 40.8% ※退職年不明が3名いるため
②	過去10年（6～15期生）	35.8 or 39.6% ※退職年不明が2名いるため
③	過去5年（11～15期生）	30.0%
④	過去3年（13～15期生）	33.3%

①は軽い学科1間口、重い学科2間口だったころの卒業生を含んでいる。

②は平成14年に軽い学科2間口、重い学科1間口に学科転換をしており、その年の入学生が卒業した年からの数値。

③は平成21年に本校の教育課程が改定された翌年からの数値。

④は教育課程の改定した年の入学生が卒業した年からの数値。

本研究の目的を考えた場合、直近の③や④の数値で述べるべきだろう。ただし、本校の場合一般就労者数は年平均4.5名しかいないため、その少ない就労者数と退職者数で検討するのは本来誤差が大きすぎるので、あくまでも参考として考える。

1990年代前半から言われてきた言葉で、『753退社』というのがある。これは中卒・高卒・大卒生の卒後3年以内の離職割合がそれぞれ7割、5割、3割程度ということを指している。全国的には平成18年頃から『643退社』に言い替わっているらしいが、北海道は依然変わらないようである。そうであれば、本校は過去3～5年で3割程度ということから、本校では特別支援教育において、現在に至るまでの本校の教育課程や先生方の指導から、一定の成果をあげていることが読み取れる。

しかし、改めてこの本校の離職率の数値は誤差が大きいことや、入学年度により生徒の実態が大きく異なるため、離職率が高い低いといった数値ではなく、離職原因の本質を洗い出し、その中から教育課程の編成に取り入れる要素があるかどうかを探る必要がある。

そこで、直近の5年（平成22～26年卒、表1③）を抽出すると、一般就労者合計30名のうち離職者は9名おり、その主たる退職理由は以下のとおりである。

- 企業の倒産
- 家庭の都合
- 職場でのコミュニケーションの失敗など
- グループホーム利用者の異性交遊

このように、本人が主たる原因となっているのは●の二つの事例で、これについては、教育課程による学習指導の検討が必要とされる要素と言える。

（２）企業・福祉サービス事業所からの本校への要望

次に、卒業後の受け入れ先は、本校の生徒に何を求めているかをまとめる。

本校では３学年の現場実習（前提実習）の受け入れ企業や福祉サービス事業所に、実習後に評価表の記入をお願いしている。本人の実習中の様子や、採用の可否はもちろんだが、今後の教育活動に反映させるために、学校教育への要望も記入していただいている。最新のデータとして本年３月卒業生（１５期生）の評価表より、今、本校の卒業生に企業・福祉サービス事業所は何を求めているかを探る。

進路指導部では評価表を「一般就労用」「福祉的就労用」「福祉的就労＋グループホーム用」「グループホームのみ用」に分けて記入を依頼している。昨年は２３名の評価表を「一般就労用」９か所、「福祉的就労用」７か所、「福祉的就労＋グループホーム用」３か所、「グループホーム用」３か所に配布し回収した。以下にその回答を載せる。なお、「福祉的就労＋グループホーム用」では複数の生徒が実習していることから同じ福祉サービス事業所から複数の回答をいただいている。

【資料】本校の生徒に求める力とは ～平成２５年度３学年現場実習評価表より～

<一般就労用>

- 本生徒が卒業後に社会人として就労するために、今後の学校生活でどのようなことを身につける必要があると思われますか。

○介護サービス業

資格をとり、それを生かして仕事をするになると、介護は記録が必要になるので、文章を書くことが要求されます。短時間で毎日実習の記録を書けていたのですが、誤字や脱字が多いのが気になりました。

本人も自覚していましたが、時折、友達言葉になってしまう時があったようです。

○サービス業

実習期間も７週間と長い期間でしたが、日々、作業している姿を見ると、徐々に作業内容を理解して、スピードも早くなって成長していると思います。課題だった、解らない事があった時に周囲の人達に聞けるかどうかでしたが、実習を重ねることによって、自ら積極的に話しかけられるようになっていましたので、良くなったと思います。２回の実習期間を経て、本人は色々な面で非常に成長したと思います。

○食品加工業

作業についてはまったく問題ないようです。休日の過ごし方を充実させる必要がありそうですね。

○食品加工業

年齢層の違いもありますが、マイペースに自分を通してしまう場面があり、相手の気持ちも考えられるようになるよう支援しました。

- 実習期間、巡回、学校の対応など、今回の実習を通しての感想や御意見など、どんなことでも結構ですので御記入ください。また、障害者雇用について御意見等ありましたら御記入ください。

○介護サービス業

実習生さんが学校でいろいろ経験させていただいているので、実習がスムーズに行きました。

今後もたくさんの経験を重ねてあげてください。 よろしくお願ひ致します。

○食品加工業

実習期間中に巡回をし、実習者の様子を確認しに来る事は大事だと感じました。直接、会社の人間へは言いにくい事があっても、先生となら話が出来る場合もあるので。

○食品加工業

様々な環境の生徒や家族の方が今金高等養護学校で学ばれている事と思います。先生方の御苦労を察するに余りますが、障害のある生徒の皆さんが、自分自身の存在の価値を感じられる様に御支援いただければと思います。 障害の軽重にかかわらず、地域で生活することには、それぞれ困難さがあります。どんなに困難なことがあっても、必ず支援者がいることを伝えていただければと思います。

<福祉的就労用>

- 実習生の課題等について

実習生および保護者は貴施設の利用を希望しておりますが、実習期間中の様子から、施設を利用するにあたっての課題等について御記入いただければ、今後の指導に役立てたいと思いますのでよろしくお願ひいたします。

○就労継続B型事業所

当事業所の中では、どうしても『かわいい実習生』として、目を細めて見てしまう所があります。残りの学校生活、同年代の友達と人間関係を学びながら楽しく過ごして欲しいと願っています。

○就労移行支援事業所

作業中、休憩時間等、職員以外の利用者とも会話やコミュニケーションをとれるようになると良いと思います。

先々に進もうとせず、いま依頼された事をきちんと行い、次に何を行うか聞いてから行動すると良いと思います。

○就労継続B型事業所

当法人は、障害種別問わず、どんな障害や病気を持った方でも利用できる施設になっている為、作業能力、作業内容等は様々です。そんな中でも、学校とは異なった環境で戸惑ってしまうかもしれませんが、決して自分より作業をこなせない人を責めたり、疑問に感じたりせず、受け入れ助けて支えてあげようという気持ちを育てていって欲しいと思います。

○就労継続B型事業所

作業パターンなどを理解、習得し、大きなミスに繋がることはありませんが、慣れることで集中力に欠けて、仕事の仕上がりが増えなくなってしまうことがありました。

○就労継続支援B型事業所

実習期間が短いこともあるかもしれませんが、一連の作業の流れを把握し、次の作業に向けての準備等を確実に出来るようになって欲しいです。 対人面では特に問題なく、他の利用者とも話は出来ていましたが、もう少し積極的に職員や利用者に対し、質問等をしていただければと思いました。ケアホーム内での他の利用者との交流はあまり見られず、一人で居室にて過ごされている事が多かったです。

○就労継続支援B型事業所

作業で注意する点を手本を示して教えると、理解を示し、作業を行っていましたが、時折、検品を忘れることがありました。声かけをするときちんと検品をすることが出来ていました。また声かけをすると白衣をきちんと着ることが出来ていましたが、自ら気を配ることが出来ると、なお良いと思います。

○就労継続支援B型事業所

作業を行うことに関しては全く問題ありませんが、次の作業に移る時に少々戸惑うことが見受けられました。わからない事があれば、積極的に職員に対し、質問等出来るようになってほしいです。

○就労継続支援B型事業所

食品を扱う施設が殆どなので、できるだけ料理や食品に関心を持っていただけたらと思います。

● 学校教育・家庭教育で身につけておいた方がよい点について

今回の実習生に限らず、一般的に高等部卒業までに身につけておいた方がよいと思われる点について御記入いただければ、今後の学校教育・家庭教育の中で生かしていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○就労継続B型事業所

◎気持ちの安定（不安になったときの対処法を知っていること）

◎体力

◎自立した活動の経験（一人で○時間△できる）※作業に限らず、休憩も

◎衛生面：マスク・作業帽子・手袋の使用等

◎排泄・食事など基本的な身の回りのことが一人でできる

◎好きなことがある。

○挨拶・返事・質問・報告等のやりとり

○作業能力

○就労移行支援事業所

・対人関係を築けるようになること（コミュニケーション）。

・帰宅時のバスで寝過ごすことが数回あったため、体力をつけてほしい。

・依頼された仕事以上の事をしている事があったため、自分が今行っている仕事を把握できるようになる事。

・会話の中で声が大きくなり、一方的になることがあったため、年齢を問わないで対話できるようになる事。

○就労移行支援事業所

いつも笑顔で素直な面が一番良かったと感じましたが、今後社会に出て、特に女性の方ですので、誰かに騙されやしないか等、余計な心配をしてしまいました。信頼関係は一定期間お互いを知って生まれると思いますので、多少疑う気持ちも必要かもしれませんね。

- 実習期間、巡回、学校の対応など、今回の実習を通しての感想や御意見など、どんなことでも結構ですので御記入ください。また、障害者雇用について御意見等ありましたら御記入ください。

○就労継続B型事業所

ご両親は、ご多忙な中、前回同様に熱心に実習をサポートしてくれていましたので、〇〇さんも安心して取り組めたと思います。進路の先生・担任の先生にも適切で丁寧な連絡・巡回指導をいただきましたので事業所としても不安なく実習を受け入れることが出来ました。現場実習を有意義なものにするためにも学校・ご家庭から必要と思われる情報を正確に伝えていただけることが大切だと感じております。

○就労移行支援事業所

以前にも実習に来ていたことで、スムーズに作業やルールを守ることができていました。今後も実習前にアセスメントシート（個人調査表）があると支援に役立ちます。

<福祉的就労＋グループホーム用>

- 実習生の課題等について

実習生および保護者は貴施設の利用を希望しておりますが、実習期間中の様子から、施設を利用するにあたっての課題等について御記入いただければ、今後の指導に役立てたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

入浴や食事時間に時間がかかっていた。共同生活である為、あまり時間をかけてしまうと、次の人が困ってしまうので、あまり時間をかけずにできたらと思いました。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

人とのコミュニケーションは問題ありませんでした。就寝時間を設定する事により、起床が一人で出来るようになればと思いました。

○グループホーム（日中活動～就労移行支援事業所）

他の利用者の方とのコミュニケーションが苦手なようでしたので、自分から話しかけるなどの努力を、自分でできるようになると良いかと思われます。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

部屋に一人でいることが多かったです。人との関わりを持つことで、本人が楽しく生活ができると思いました。

○ケアホーム（日中活動～就労継続支援B型事業所）

慣れない環境の中で生活をされていました。分からない事や困ったことが多かったと思っています。本人から率先して人に聞く事ができるようになればいいと思っています。

● 学校教育・家庭教育で身につけておいた方がよい点について

今回の実習生に限らず、一般的に高等部卒業までに身につけておいた方がよいと思われる点について御記入いただければ、今後の学校教育・家庭教育の中で生かしていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○就労継続支援B型事業所

職員や先輩の利用者に対しても、きちんと丁寧にあいさつが出来る人になってほしいです。
また、いかなる場所においても、対人とのコミュニケーションを積極的に取れる人になってほしいです。

○就労継続支援B型事業所

あいさつ、返事等、はっきりと失礼のない言葉遣いで受け答えが出来るよう見につけてほしいです。
いかなる場所でも、対人とのコミュニケーションを積極的に取れる人になってほしい。

○就労継続支援A型事業所

卒業をするまでに、あいさつをきちんと見につけておいた方が良いと思います。なぜなら、あいさつする事によって上司や仕事仲間からも「あいさつが出来ているね!」と言われるからです。これから卒業して社会に入ったらあいさつは必ずというほど重要になっていきます。

○就労移行支援事業所

自ら将来の展望を見据え、その目標に向かって努力することが出来るようになれば良いと思います。
生活と仕事の両立の重要性を認識することが出来るようになれば良いと思います。

○就労移行支援事業所

どの職業につくにあたって、報告が出来る方が良いと思われます。何か思っている事などもためこまないで、口に出して言える方が作業を行っていても失敗が無いのではないかと思います。

● その他

現場実習期間や巡回等、学校に対してのお気付きの点や、疑問・要望等どんなことでも結構ですので御記入くださるようお願いいたします。

○就労継続支援B型事業所

本人がパニック状態になった際の対処方法を教えていただいたらよかったと思いました。

○就労継続支援B型事業所 / ケアホーム

身だしなみは問題なく行えていました。もっと向上して頂くために、本人に意識させながら学校生活を送らせていただきたいと思います。

以上のことから、企業・福祉サービス事業所共に、主に「コミュニケーションに関する能力」を強く求めている事がわかる。仕事に関わる報告・連絡・相談（ほうれんそう）だけではなく、出・退勤時や休憩時間などでの挨拶を含めた、日常のコミュニケーション能力について広く身に付けることが求められている。その他、作業能力、国語力、身辺自立などもあげられている。

（３）卒後支援の実際から

次に、近年の卒後支援の中で、近年の卒業生の傾向として象徴的な事例をあげ、在学中にどのような支援が必要かを考える。個人情報保護から具体例を記載しないが、３名の事例から検証する。それぞれの課題は以下のとおり。

ア 「コミュニケーション能力、障がいに対する自己認知、親の認知、携帯電話（SNS）」

イ 「コミュニケーション能力、障がいに対する自己認知」

ウ 「コミュニケーション能力、障がいに対する自己認知、性」

エ それぞれの課題から

上記３名の実情を踏まえ、生徒自身の傾向として大きく次の２つが考えられる。

① 障がい受容の不足

「障がい」を自分の課題として捉え、それに対する対処方法を身につけていくことで、自分と社会や仕事に対する考え方、生き方に到ることが出来る。Ａ男の段階としては、「どうして自分が？」という障がいを否定する考えを抱いたままである。Ｂ男は、障がいを否定する時期は過ぎ、少しずつ受容しながら、自己肯定感を得ることでバランスを取っている状態である。そのバランスの中でメタ認知を進めている。Ｃ女については、定型発達姉がいることで自分の出来ないことを受け容れることが出来ていない。家族関係の問題もあるが、自分を受け容れ、認めてくれる人に対しての依存度が高い傾向が見られる。

② コミュニケーション能力の不足

Ａ男の場合の問題は、本人の性格的な問題と、地域的に変わらない人間関係も起因していると考えられる。これに、携帯ゲームの使用などで他との関わりの機会を失ってきた社会的環境要因も重なって、言葉などによるコミュニケーションを学ぶ機会を逸してきたと想像する。そのことがスマートフォンでのＳＮＳによる安易なコミュニケーションツールでの「つながり」に依存していく原因になっていると思われる。さらに強い者に依存していく傾向にある性格も災いして、友人という対等な関係よりは従属的な関係を求める。これは、家族関係が希薄な生徒に多く見られる傾向である。このことが、Ａ男の場合、就労先での友人関係よりも学校時代からの友人関係を求めてしまう傾向に拍車をかけている。

Ｂ男の場合は、生育過程における支援者の影響によるものも大きく、道徳的な考えの基礎になっている。さらに、就労場所の環境も相まって、精神的な成長を助けていると考えられる。しかし、Ａ男同様、関係性を従属的なものに求めることも多く、今だ不安定な状態である。将来についても、あまり深い洞察を持てずに判断してしまう可能性がある。さらにＣ女も人間関係力の弱さから共依存的な関係しか築くことができない弱さを持っていることから、大きな問題に発展している。親自身の障がい受容も進んでいないために、環境を変えることで防ぐことができるのではないかと考えている。しかし、これは本人不在の問題解決であり、これからも本人の課題として残っていると思われる。

（４）本校の教育課程との関連と提案

先の「（１）離職率と離職理由」から、今までの本校の教育課程が卒業後の就労生活に向けて一定の成果をあげていたと考えられる。しかし、離職の理由を見たときに、コミュニケーション能力や性教育に改善が必要と考えられる。「（２）企業・福祉サービス事業所からの本校への要望」からは、主にコミュニケーション能力が求められ、その他に作業能力、国語力、身辺自立などもあげられている。「（３）卒後支援の実際から」からは、自己認知、コミュニケーション能力の向上、そして性の指導が求められている。

更に、あらゆるニーズに対応できる生徒像を想像するならば、生活上の困難を解決するためのスキルとしての課題がいくつか考えられる。今年度の就労に向けた企業面接において自らのライフプランのビジョンなどを語らせる質問が出されていたので、それらの質問に答えられるだけの表現力を身につける必要がある。また、卒後支援や地域の相談支援の考え方は、あくまで本人のニーズに基づいてプランニングしていくものである。本人が出来るところ、出来ないところなどを自己認知し、支援して欲しいところを発信できることが必要である。

以上の事から、本校の教育課程との関連として、「自立活動」「LHR」「道徳教育（情報教育、性教育も含む）」などの充実があげられる。

各教科や生活単元学習等をはじめ「自立活動」「LHR」の中でも、コミュニケーション能力の向上やSSTを利用した授業が考えられる。また、生徒自身の意思決定が出来るようなシステム作りが必要であり、自治的な活動をトレーニングとして機能する事が大切となってくる。このことが学び合う意欲と習慣をつけ、ルールのリレーションの確立と結び付いている。

これらを踏まえて、「メタ認知」「コミュニケーション」などの力をつけるための教育活動として、「自立活動」の時間で出来る事に、クラスのメンバーを教育共同体に育てていく手法の「ミーティング活動」がある。これには「人の話を真剣に聞く、共感する、丁寧に話す、意見の違いを乗り越えて折り合い、合意すること、協力して決めたことを実行すること」等の目的がある。「ミーティング活動」とは、これらの目的を達成するための手段であり、個人の自己肯定感を育てることや自治的集団を育てることが自分に対する気づきに繋がると考える。そして、他者という鏡を通して、自分を知る手段になると思われる。

「道徳教育（情報教育、性教育も含む）」の充実については、「法の遵守」や「勤労観」、「公德心」を軸にした授業づくりを推進していく。特別支援教育では、意識されにくい内容ではあるが、社会とつながりを持って生きていく社会人として必須事項であると考えられる。それらを授業の中で考えさせる過程が必要である。そして、生徒一人ひとりの道徳律としての確立を目標とすることである。情報教育では、単に操作スキルではなく、メディアリテラシーを主だった目的とした教育を取り入れる事の必要性を感じる。メディアリテラシーとは、情報が流通する媒体（メディア）を使いこなす能力、メディアの特性や利用方法を理解し、適切な手段で自分の考えを他者に伝達し、あるいは、メディアを流れる情報を取捨選択して活用する能力のことである。近年、卒業生の問題事例において、この知識が乏しいことから正しい選択が出来ないために携帯電話（スマートフォン）を媒体としたトラブルが多数起きている。性教育については、生活単元学習の中でも「心とからだ」の単元を設けて教育課程に盛り込まれているところであるが、道徳教育の中でも「性教育」を取り入れていくべきではないかと感じる。卒業後のトラブルの中で女子に多いのは、異性問題であり、特に、性の問題である。道徳の中の公德心と絡めて教えていく必要があると考える。

次に、上記の充実のために提案するのは「授業の在り方」である。本校の授業形態として、「一

斉授業＋TT」が主に取られているが、この形をもう一度見直して「協同学習」などをベースにコミュニケーション能力の向上を目的として考えていくことで、苦手意識を持つことなく「関わり」をスキルとして得られるようになって考えられる。他との関わりを学習活動の主として考えることは、個人を超えた「集合知」を生み出すことである。メタ認知能力は、自分以外の他者との関わりでしか得られないものである。協同学習では「互恵的な協力関係」「個人の責任が明確」「参加の平等性」「活動の同時性」の四点を活動の中で保証しつつ、進めていくことが大切である。また、コミュニケーション力は、「つながる力」でもある。セーフティネットにアクセスする力、SOSを出す力、または自分のSOSに気づく力、それらを得ることが社会人として社会で生きていくことに繋がっていると考ええる。

（５）さいごに

教育基本法第一条 教育の目的では、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」としている。変化の激しいこれからの社会に対応できる社会人としての在り方を私たちは教える必要がある。シチズンシップ教育により、民主主義社会を支える市民として十分な役割を果たせるよう、教育活動を行うのが私たちの仕事である。多文化社会、多様化社会と言われる昨今、幸福感も多様化している中で、適切に社会と繋がり、伝達（コミュニケーション）することで自分なりの「幸せ」を追求し、生きていく術を身につけることがキャリア教育の一つであると考ええる。そのための教育課程の編成に本調査を活用していただきたい。

●引用文献

- ・ 中学校 学習指導要領 第三章 道徳編
- ・ 小学校 学習指導要領 第三章 道徳編
- ・ 「授業づくりネットワークNo.16 協同学習～学び合い、学びの共同体 その良さと実践」 学事出版
- ・ 「授業づくりネットワークNo.4 協同学習で授業を変える」 学事出版
- ・ THE 協同学習 明治図書出版
- ・ 「クラス会議」完全マニュアル人とつながって生きる子どもを育てる 赤坂真二 著 ほんの森出版
- ・ 先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級づくり 赤坂真二 著 ほんの森出版
- ・ 修行論 内田 樹 著 光文社新書
- ・ 学級づくり 成功の極意 赤坂真二 著 明治図書出版
- ・ べてるの家の「当事者研究」 浦河べてるの家 医学書院
- ・ 「非」援助論 浦河べてるの家 医学書院
- ・ 「7つの力」で育てるキャリア教育-小学校から中学・高校まで 諸戸祥彦 著 図書文化社
- ・ 学校掃除と教師成長 自問清掃の可能性 平田 治 著 一莖書房